

# 4

## 苦酸泄熱[苦酸薬による泄熱]

「苦酸泄熱」という薬の組み合わせ方も、清熱剤に属するもので、主に熱毒内盛証の治療に使われます。孫思邈はこの方法を高く評価し、『千金要方』10巻に以下のような言葉を残しています。

「除熱解毒を行う場合、苦酸法に勝るものはない。具体的には、苦参・青葙・艾・山梔子・葶藶子・苦酒・烏梅などを多用することが大切である」

「熱が強い場合、苦酸薬を使わなければ、問題を解決することはできない。(中略)裏熱証を治療する場合、病状による段階別の用薬順序にとらわれず、青葙・苦参・艾・苦酒を使って治療を行うことができる」

「[熱が強い場合は、その程度にあわせて]薬を服用する回数を少しずつ増やしさえすれば、治らないものはない」

このような非常に特色のある用薬法は、隋唐代の風潮を反映したものです。特に苦薬に酸薬を合わせるという組み合わせ方は、『傷寒論』で烏梅丸が示している用薬法を発展させたものといえます。孫氏があげた薬の中では、苦参・青葙・山梔子が特に多用されます。また、ここでの艾には「火鬱発之」[鬱熱を冷ますには、鬱を解き、気の流れをよくする必要がある]の意味があります。葶藶子は、気味は辛・苦・大寒・無毒で、瀉肺・瀉水作用のほか、体内に停滞している熱を下に降ろすことのできる薬です。

苦酸法による方剤の中で多用されるものとしては、例えば2升の酒に1両の苦参を入れ、1升になるまで煎じてから、これを1度に服用する方法があります。温毒による重症患者に、この薬を服用させて吐かせたり、または服用後、少し厚着をさせて汗をかかせたりしますが、どちらの方法でも治癒させることができます。

また熱毒が手足を侵し、局部が赤く腫れ、灼熱感や痛みを伴う場合、この薬を外用薬として使うこともできます。また5～6日以上続く熱病で、高熱が下がらない場合、苦参湯を使うことができます。苦参湯は、苦参・黄芩・生地黄よりなる方剤です。また5～6日続く傷寒で、斑[皮下出血]がみられる場合、猪胆湯を使うことができますが、その際、猪胆湯に苦酒・

鶏子〔卵〕を加えます。薬を服用して汗をかけば治癒します。

また『類証活人書』には葶藶苦酒湯という方剤が載っています。苦酒1升・生艾汁半升・葶藶膏1合よりなる方剤です（3服分の用量）。これは7～8日続く傷寒で、内熱が解消されない病証に使います。これらの例からも、過去の大家たちの苦酸法に対する経験の豊富さを知ることができます。

龐安時は『傷寒総病論』3巻で、苦寒法に関する以下のような鋭い分析を提示しています。

「生姜・桂枝・人参などの辛甜味薬には、発散寒気作用があるので、まだ邪気が体内に入り込んでいない場合、つまりまだ内熱証になっていない場合に使用する。このような辛甜薬の作用は調治と呼ばれる。これに対し苦酸薬には、正治法によってすみやかに内熱を治療する作用がある。辛甘薬に苦酸薬を合わせる、また苦酸薬に辛甘薬を合わせる、というような陰陽の法則に背いた用薬法は、病気を悪化させるだけである」

## 5

### 苦辛通降〔苦辛薬による通降〕

「苦辛通降」（辛開苦泄）とは、辛味薬と苦味薬を合わせて使う方法です。辛味薬には、桂枝・乾姜・半夏・生姜・橘皮・香附子・呉茱萸などがあり、すべて宣通気機・祛寒化湿・和胃降逆などの作用があります。苦味薬には、黄連・黄芩・枳殼・枳実などがあり、すべて泄熱・和胃・消痞除満などの作用があります。そして、辛味薬と苦味薬を合わせた苦辛通降法には、調和寒熱・開通気機・通陽除痹・消痞除満などの作用があります。苦辛通降法による方剤は「和解剤」「理気剤」に分類され、胸痹〔胸部の痛みや閉塞感を主訴とする病証〕や痞満〔腹部において上下の気の流れが滞ったために生じる病証〕などの治療に多用されます。

よくみられる組み合わせとしては、生姜と枳実を合わせる方法があります。宣通胸中陽痹作用〔胸部の気を通し、陽気の内鬱を解消する作用〕があり、痰飲と気の互結による胸痹に多用されます。このような作用は、生

# 3

## 藁本

辛・温・無毒。足太陽の本経薬。督脈の病を治療する作用もある)

### 1 風邪による頭痛を治療する

風寒の邪気が太陽経を侵すと、頭痛・頭頂部の痛み・痛みが歯や頬に及ぶ、などの症候が現れます。藁本は、このような症候を治療することのできる薬です。張元素は「藁本は太陽経の風薬である。寒気が本経を侵すと頭痛が生じる。これを治療する場合、藁本の勇壮な気は、不可欠のものである。頭頂部の痛みも、藁本を使わずに治療することはできない」と述べています。木香を合わせると、辛温性・芳香性による開發昇散作用が強められるので、霧露の清邪\*が上焦を侵した病証を治療することができます。白芷を合わせて顔に塗る方法でも同様の作用があり、清気を顔に向かわせる作用がさらに強くなります。また羌活・蔓荊子を合わせて、頭風頭痛を治療する方法も多用されます。これらの方法は、みな風寒の邪気(同時に湿邪が存在する場合もある)による外感病を治療する方法です。

\*霧露の清邪：体の上部や体表部を侵す性質のある邪気。

### 2 風湿による身痛を治療する

風寒湿による病で、体の痛み・腰痛・腰が冷える、などの症候がみられる場合、藁本に羌活・独活・蒼朮を合わせて使います。これは祛風勝湿作用によって痛みを止める治療法です。

督脈の病で、頭痛・背中 of 硬直・手足の冷えなどの症候がみられる場合、藁本に羌活を合わせて使います。佐薬として官桂を加えることもあります。慢性的な痛みには、さらに細辛を加えると効果を高めることができます。

### 3 頭部・顔面部の風邪を去る

風湿の邪気が頭部や顔面部を侵し、湿疹・皮膚の損傷・鼻が赤紫色になる・にきび・頭皮が剥がれる、などの症候がみられる場合、藁本に白芷を合わせて使います。内服薬として使うこともできますし、粉にして外用薬として使うこともできます。祛風勝湿作用によって、皮膚は新生し、顔色もよくなります。『便民図纂』には、同量の藁本と白芷を粉にし、これを夜頭髮に擦り込み、朝起きたら梳ですく方法が載っています。数日続けると、剥がれた頭皮をきれいになくすことができます。

### 4 胃痛泄瀉を治療する

湿邪が気の流れを阻害し、風木が胃を侵すと、口がベタベタする・唾液が多い・突発的に起こる胃痛・胃が傷むと下痢をする、などの症候が現れます。これを治療するには、藁本に蒼朮(または陳皮・香附子)を合わせて使います。煎じて内服する方法と、粉にして生姜湯で服用する方法とがあります。下痢が胃痛を伴う場合にも使うことができます。

また胃痛や腹痛は顕著でなく、お腹がゴロゴロ鳴り、腹中が切迫して頻繁に下痢をし、下した後は楽になるような状況もあります。これは風木が土を侵し、湿邪が強まったために起こるものです。治療には、藁本に白芷・白朮・陳皮・甘草を合わせて使います。陽気を上昇させることで、下痢を治療する方法です。確かな効果があります。

### 5 帯脈の病(婦人科)を治療する

おりものが多い(サラサラしていて臭いはない)、または膻の出血が止まらない(色は薄く血塊は少ない)という病証を、李東垣は湿邪による病だと考えました。そして藁本と白芷を主薬として治療を行う方法を作り出しました。湿邪が強い場合、蒼朮・白朮を加えます。出血が止まらない場合は、防風・荊芥を加えます。下陥が顕著な場合は、升麻・柴胡・羌活・独活を加えます。これは昇陽除湿法と呼ばれる、非常にすぐれた治療効果